



Data

監督・脚本: ホン・サンス
 出演: キム・ミニ/イザベル・ユペール/チャン・ミヒ/チョン・ジニョン

👁️👁️ みどころ

カンヌ国際映画祭にやって来たついでに、韓国人女優キム・ミニとフランス人女優イザベル・ユペールを使って本作を！「早く、安く、おいしく」は牛井の吉野家とキム・ギドク監督の特技と思っていたが、不倫を公言したホン・サンス監督にもそんな技が！

ストーリーは単純。女にだらしない主人公の映画監督は、ひょっとして監督自身？2人の女の間でソ監督はいかなる遊泳を？

ストーリーのポイントはタイトル通り「クレアのカメラ」だが、フランス人観光客クレアの摩訶不思議な“写真哲学”とは・・・？

今回ホン・サンス監督の4作品を全て鑑賞したが、なるほど、ホン・サンス監督のお手並みや、恐るべし！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■映画祭のついでに本作を企画！即完成！■□■

カンヌ国際映画祭は世界3大映画祭の1つで伝統あるものだから、そこに出品されたり参加するだけで興奮し頭の中がいっぱいになるのが普通。しかして、2016年の第70回カンヌ国際映画祭には、韓国からはパク・チャヌク監督の『お嬢さん』(16年)、『シネマ39』(189頁)の上映でキム・ミニが、フランスからは『エル ELLE』(16年)、『シネマ40』(31頁)の上映でイザベル・ユペールがカンヌに来ていたが、ホン・サンス監督とこの2人の女優は“特別なお友達”らしい。そこで、同監督はその機会を利用し、2人の女優のちょっとした空き時間を使って、新作を企画。そして、カンヌでロケハンをする中、海岸沿いにあるトンネルを見つけたところから、一気にストーリーが完成したらしい。

ホン・サンス監督の映画作りには、もともと脚本も筋書きもないことが『それから』(17年)『夜の浜辺でひとり』(17年)『正しい日 | 間違えた日』(15年)の3本を観てよくわかったが、まさに本作もそれだ。本作を含めて私が今回続けて鑑賞したホン・サンス監督の4本の作品はすべて「対話劇」の連続で構成されているが、これならストーリーの大筋が決まり、個々のシチュエーションごとの対話の内容が決まれば、あとは俳優たちの演技力に委ねればいだけ。そうすると、ホン・サンス監督のやり方をトコトン知り尽くした“特別なお友達”であるキム・ミニとイザベル・ユペールなら、そんな演技はちよるいものだ。韓国の鬼才、キム・ギドク監督は「吉野家の牛丼」並みに「早く、安く、おいしく」がモットーだが、どうやらホン・サンス監督も似たような特技を持っているようだ。

■□■シャッターを切ると、相手はたちまち別人に？■□■

今やカメラはフィルムからデジタルにすっかり移行してしまったから、シャッターを押す時の緊張感はなくなり、失敗を恐れることなく何度でも続けてシャッターを押すことができる。何でも新しいもの好きだった坂本龍馬は、革靴もピストルも自分のものとして実用化していたが、写真もそう。当時は写真を撮られると魂も取られてしまうという考え方もあったぐらいだから、カメラの前に座り(立ち)、シャッターが切られるのを待つだけでもかなりの勇気が必要だったはずだ。

しかして、カンヌへ映画祭見学のためにパリからやってきたという音楽教師の女性、クレア(イザベル・ユペール)の趣味は、カメラ。そこで面白いのは、彼女は「自分が一度シャッターを切れれば、相手はたちまち別人になる」という“写真哲学”を持つと共に、その主張に不思議なオーラを持っていたこと。そのことは、カンヌ映画祭で自作を上映するためにカンヌに来ていた映画監督のソ(チョン・ジニョン)と、製作会社の女社長ナム(チャン・ミヒ)との食事の席で、クレアの“自説”にソ監督もナムも納得させられてしまった(?)ことから明らかだ。近時は、「肖像権」がやかましくなり、誰でも勝手にカメラ撮影することはNGだから、もちろんクレアが他人を撮影するときは相手の許可を取っていたが、ホントにクレアのカメラで撮影されるとその相手はたちまち別人に・・・？

■□■韓国では今なおこんな不当解雇が？その姿にビックリ！■□■

さる7月22日に閉幕した日本の国会では「働き方改革」が1つの焦点だったが、それを含めて弁護士としての私が最近感じるのは、労働法制における労働者側の権利の拡大だ。その結果、今の日本では使用者側による労働者の解雇が許されるケースは極めて限定的だが、本作冒頭にホン・サンス監督が設定した、ナム社長によるマニ(キム・ミニ)の事実上の解雇通告は違法なことはもちろん、それまでの人間関係のあり方から考えてもハチャメチャだ。マニがナム社長からの信頼厚い女性社員だったことは、1人で先遣隊としてカンヌ映画祭に派遣されていることから明らかだが、映画祭開催中に、会社ではなく誘わ

れたカフェの席で、突然「あなたは不誠実」だから、「今すぐ解雇する」ので、「直ちに帰国してくれ」と言われたマニはビックリ。それを聞いたマニが、自分を不誠実だと判断した根拠をしつこく聞いたのは当然だが、ナム社長はそれに答えないうえに、この不当解雇宣言はなおさら酷い。

他方、その後のソ監督とナム社長が2人で食事をしているシーンでは、ソ監督とナム社長との関係がどこか怪しげであるうえ、ナム社長がやんわりと若い女マニと火遊びをしたソ監督を責めているのがミエミエだから、なるほど、ナム社長によるマニの（不当）解雇のホントの理由は、ソ監督を巡る三角関係のもつれ・・・？しかし、それならそれで女同士でつかみ合いのケンカでもすればいいのに、あんな形で権力をカサにきてマニを解雇し、ソ監督との関係を切らせようとするとは・・・。

■女にだらしないソ監督の姿はホン・サンス監督自身？■

今回、4作を続けて観たホン・サンス監督作品では、いずれも女にだらしない男の姿が極端に目立っている。『それから』だけは、女にだらしない男は映画監督ではなかったが、『夜の浜辺でひとり』では後半にだらしない映画監督が登場してきたし、『正しい日 | 間違えた日』では女にだらしない映画監督が出ずっぱりだった。しかし、本作でも女にだらしない映画監督ソが登場するが、ひょっとしてこれはホン・サンス監督自身？

冒頭のナム社長によるマニの解雇通告はナムだけの判断によるもので、ソ監督の指示によるものではなさそうだが、カンヌにやってくるまでなおナムとマニ、2人の女の間で揺れているはずのソ監督が、今度はフランス人のチャーミングな女性、クレアを見てやっぱり声を掛けてしまう姿には恐れ入る。クレアの隣の席に移っていく厚かましきも、韓国人男性特有のもの・・・？

ソ監督の無神経さは、ナムとの食事の席に平気でクレアを招く姿にも表れているが、意外だったのはクレアの“写真哲学”談義が終わり、クレアが帰っていった後、ナムに対して「仕事の上でいい関係を続けていくために、男女の関係を清算したい」と言い出したことだ。もっとも、これは酒の勢いを借りてのことで、しらふではとても言えないこと明らかだが、それでもここまで言い切ったのは立派なもの。もっとも、これだけ女にだらしないソ監督のことだから、その後ナムから解雇通告を受けたマニと、ソ監督から男女関係の清算を告げられたナムが、いかなる女同士のバトルを繰り広げるかについてちゃんと予想できたの？そんな目で、本作を観ていると・・・？

■カンヌは狭い！写真の取り持つ縁にビックリ！■

カンヌの街の大きさや人口について私は全く知らない。しかし、本作のようにクレアとソ監督、ナム社長、マニとの偶然の出会いが次々と生まれ、クレアの写真の取り持つ縁がどんどん広がっていく姿をみると、カンヌはかなり狭い街だ。本作後半のカンヌの海岸沿

いでのクレアとマニとの出会いをみていると、なおさらだ。海岸をぶらついていた2人が出会い、クレアが撮った写真を見せてもらったマニはビックリ。なぜ、クレアの写真にソ監督やナム社長が写っているの？そんな偶然の中で自分がナム社長から解雇されたホントの理由がわかったマニは、クレアと共にあの時クビを言い渡されたカフェに再度向かい、クレアが同じ場所でマニに向かってシャッターを切ると・・・？クレアの写真哲学の通り、ひょっとしてマニはたちまち別人に・・・？

そんなマジックのような話がホントにあるのかどうかは疑問だが、本作ラストはある事務所の中でテキパキと荷物をパッキングしているマニの姿が登場する。ナム社長からクビを言い渡されたマニがすぐに韓国に戻らずカンヌに残っていたのは、安モノのチケットで来ていたため、予定の帰国日を早めることができなかったから。そんなマニが、なぜここでこんな作業をしているの？この作業はどうやら、自分の帰国のための荷物整理だけではないようだから、ひょっとしてマニは職場に復帰したの？すると、ソ監督はうまくナム社長との男女の縁を切って、マニとの不倫関係を復活させたの？そこらあたりを、当事者たる(?) ホン・サンス監督は突っ込んで描かないが、どうやらこれは・・・？しかして、マニの職場復帰が実現できたのは、ひょっとして「クレアのカメラ」のおかげ・・・？いやいや、ここまで観てくると、ホン・サンス監督のお手並みや、恐るべし・・・。

2018 (平成30) 年8月1日記